

# 海底一万メートルのレジ袋

高崎市立大類中学校

三年 曾根 明依

あなたは知っていますか。レジ袋をネットレスにして泳いだり、胃袋からプラスチックを出したりする、ユニークな動物がいることを。では彼らの出身地はアフリカ？それとも東南アジア？

いいえ、世界中です。では、希少生物でしょうか。それも違います。どちらも、かつてはふつうのウミガメと海鳥でした。私たちがもつと気をつけていけば。

昨年、レジ袋の有料化が始まり、私はそれに至るまで何があったのかに興味を持ち、自由研究のテーマにしました。みなさんは「海洋プラスチック」という言葉を聞いたことがありますか。私達は、年間ジェット機5万機とほぼ同じ重さのプラスチックを出し、海に流出させています。ある調査では海底約一万メートルに、レジ袋が落ちていたという報告もあります。プラ

スチックは分解されるまでに何千年もかかるため、海に一度流出したプラスチックは砕かれ、いくつかに分かれながらも海を漂い続けます。これが海洋プラスチックです。しかし、本当の恐ろしさは海洋生物が風化して細かくなったプラスチックを食べてしまうことです。彼らの胃にたまったプラスチックは消化されずとなく残り、栄養を取り込めなくなりやがて死をもたらします。

これを聞いても最初は自分たちが動物を苦しめているという実感がありませんでした。そこで近くの大きな河川敷へ行き、どんなゴミが落ちているのかを調べました。近所の子ども達が一生懸命にサケの卵を育て、放流するボランティアが毎年行われている、私の思い出が詰まった場所です。懐かしさを噛みしめながら歩いていくと、そこにあつたのはなんと数々のゴミ。ペットボトル、包装紙、ストロー。私はとてもショックを受けました。思い出の川に投棄されたゴミは、海洋プラスチックの問題をどこか他人事のように捉えていた私に、一気に現実を突きつけてくれました。

「ポイ捨てはいけない。」「プラスチックを減らそう。」

というありふれたポスターを見てみなさんは何を思いますか。「どうせ自分だけやっても世界は変わらないのでは。」と書いていませんか。実はその通りです。海洋プラスチック問題は一人の力ではどうにもならないところまで来ています。だからこそ、この現実を世界中の人々が知り、危機感を持ち、「このままではいけない。」と意識して行動に移すことが大切だと思います。

実際にプラスチックの影響が私達の生活を脅かしつつあります。海で小さくなったプラスチックをプランクトンが食べ、それを魚が食べ、その魚もまた私達がいただきます。このまま何も変えずに過ごしてしまうと、二〇五〇年には魚より海に流出したゴミの方が多くなってしまう。私達より少し後に生まれた子供が、青く透き通った海も、にぎわう砂浜も知らないまま大人になっていくかもしれませぬ。私達はそんな未来に希望をもてるでしょうか。このような事実を少しでも知る人が増えれば、危機感をもつ人も増えるのではないのでしょうか。

私はこの問題を知り、少しでも未来を変えるために家ではペットボトルを極力使わず、洗剤なども詰め替

え用を買い替えます。家の風呂場では見慣れたシャンプー容器がゴミにならずに使われています。「当たり前」と言われればそれまでですが、この「当たり前」が世界に広がってゆけば、未来は変わると信じています。

二〇一九年には環境省が「海洋プラスチックごみ対策アクションプラン」を策定しました。世界では、たくさん取り組みがなされていますが、何よりも大切なのは、もつともつと多くの人々が「このままではいけない。」と意識することだと思います。

人類は約百年前、低コストで画期的なプラスチックという物質を作りました。それにより、文化や経済は発展しましたが、大切な自然を失いつつあります。それを私に教えてくれたのは、思い出の川に投棄されたゴミや海底一万メートルに沈むビニール袋でした。

プラスチックゴミを分別しないで多くの命を奪うか、リサイクルボックスに入れて環境を守るかはみなさんの手にかかっています。

プラスチックゴミを出さない事が、未来の地球のためだと思って、私達で小さなことから始めませんか。